

## 大麻は危険？

大麻と聞いて、何を連想するだろうか。日本では、大麻というと犯罪や裏組織といったものと結び付けて考えられることも多いのではないか。実際、現在の日本では、いかなる人も大麻の所持及び使用が厳しく禁止されている。GHQの意向で、1948年に大麻取締法が制定されたからだ。以来、日本では大麻をタブー視する声は少なくない。

ただ、ひとたび海外の先進国に目を向けてみると、日本とは全く異なる現状が垣間見える。大麻使用の目的を医療に限り合法化しているのだ。G7の参加国は、カナダや、アメリカの一部の州を除いて既に医療大麻を解禁しており、来年にはカナダでも合法化される予定である。先進国の多くが大麻の医療使用を推奨しているのは、権威ある研究機関が大麻の医療効果を認めているからだ。例えば、WHO(世界保健機関)や、IOM(米国医学研究所)といった組織が大麻治療の安全性や汎用性の高さを報告している。

「日本はもはや医療先進国とはいえない」。NPO法人医療大麻を考える会の会長である前田耕一氏は、日本の現状を憂えてこう語る。医療大麻には一定の効果が認められている。しかしながら、大麻と聞くと、アレルギー反応を起こす医療関係者も少なくないそうだ。“大麻は悪だ”という社会的通念に捉われており、医療大麻の是非について議論する段階まで進まないのだという。それゆえに前田氏は、日本は世界の医療先進国に大幅な遅れをとっていると主張しているのだ。

医療用大麻を合法化するとすると、それらが何らかのルートで流出することを危惧する人がいるかもしれない。しかし前田氏によれば、たとえ大麻が流出したとしても、それが原因で大きな危険につながる可能性は意外に低いのだという。

大脳皮質を麻痺させることによって効用を発揮するアルコールは、人々をハイにさせ、暴力事件を引き起こす恐れがある。医療用で日本においても使われているモルヒネは、依存性が高いことに加え、薬物に耐性ができて使う量が増えていく。覚せい剤はモルヒネ以上に耐性がつきやすい。

それに比べて、体の中の細胞膜に存在する受容体に結合することにより、薬効を発揮する大麻は、使用する人にリラックス効果をもたらし、喧嘩を引き起こす恐れがない。また、医療大麻を考える会の会報によると、大麻の依存性はカフェイン程度のものであり、致死量や耐性がないという。さらに、体重の減少、疼痛、食欲不振などに対して有効である。もちろん、大麻にも害がないとは言い切れない。眠くなるといった睡眠障害も一つの例であろう。しかし、「薬品に有害性があるのは常識」と前田氏は強調した。

医療大麻合法化に向けて闘う裁判の途中で、2016年に亡くなってしまった山本さんの遺志を引き継ぎたいと願う前田氏。日本の製薬業界や官僚、政治家の抵抗を突破し、大麻を含めた制度作りが必要だと懇願している。時代が変わってもっと前向きに大麻が扱われる時がくると信じている。最後に前田氏は大麻についてこう語った。「非常に世の中の構造に関わる植物。感動しない？」